

## 高野山町石の種子について

入谷 和也

## 1 高野山町石に刻まれた種子について

和歌山県伊都郡九度山町の慈尊院から高野山壇上伽藍を経て奥之院弘法大師御廟へと続く約二十二kmの高野参詣道に、鎌倉時代造立の五輪卒都婆形町石(以下「町石」という。)が(四基の五輪卒都婆形里石を含めて)計二百二十基(再建されたものを含む)、今もその道筋に立ち並んでいる。高野山町石とも称されるこの道沿いに立つ町石には、それぞれ壇上伽藍までの距離(町数)、施主、願文のほか諸仏諸尊(如来、菩薩、明王、天など)名をあらわす梵字(種子、種字とも記されるが、以下では「種子」と記載する。)などが刻まれ、この道もまた高野山町石道と称されてきた(国の史跡では近年、指定名称が「高野山町石道」から「高野参詣道」に変更され、高野山町石道は「高野参詣道」の構成資産として「町石道」に名称変更されている)。これまでに高野山町石(道)の研究に基づいた文献・書籍等がいくつか出版されているが、種子については、高野山上で造立当初(鎌倉時代)の町石が奥之院にあるものを除きほとんど残存しておらず、再建された町石に誤った種子が刻まれたと考えられるものもあり、町石ごとに刻まれた各種子から判断されている諸仏諸尊名に再検討を要するものが少なくないと思われる。

種子は、主に諸仏諸尊名を梵字であらわしたものの頭文字や諸仏諸尊の真言にある梵字一文字に由来することなどから、ひとつの梵字で複数の諸仏諸尊をあらわすことが少なくない。したがって、町石ごとに刻まれた各種子から諸仏諸尊名を比定するには、曼荼羅上の諸仏諸尊の配列などにある規則性、序列などを考慮する必要があると思われる。以下、高野山町石に刻まれた種子について検討する。

## 2 奥之院側町石道の町石と種子

高野山壇上伽藍から奥之院までに三十六基の町石が立っている。壇上伽藍に建つ根本大塔東側の階段を降りたところに奥之院側の一町石があり、奥之院弘法大師御廟柵内にある三十六町石までが金剛界曼荼羅をあらわしているとされる。なお、金剛界曼荼羅は、九会曼荼羅とも呼ばれる九つの部分で構成され、中央に位置する成身会など（他の八つの部分は成身会の変現とされる。）は、主に大日如来をはじめとした三十七尊を基本に構成されることから「金剛界三十七尊」と呼ばれる所以とされている。

金剛界三十七尊は大日如来をはじめとした五仏、四波羅蜜菩薩、十六大菩薩、内四供養菩薩、外四供養菩薩、四撰菩薩で構成され（図表1参照）、奥之院側の各町石に刻まれた種子について、本論文末の参考文献等の中で紹介している種子曼荼羅など（以下「種子曼荼羅等」という。）を参考にして、諸仏諸尊名の比定を私に行ってみた。その結果をこれから列挙するが、仮に再建された町石に誤った種子が刻まれて再検討を要すると考えられる場合、その種子に続けて種子曼荼羅等から推測した種子の一例を（ ）内に記載している。（各町石に続き、刻まれている種子、再検討した種子があればその一例、各種子から当てはめた諸仏諸尊名の順となり、若干の説明を加えている。）なお、五輪卒都婆（地輪、水輪、火輪、風輪、空輪）の地輪部（町数・種子などが刻まれた部分。）が江戸時代以前に再建されたものには○、大正・昭和に再建されたものには●を付している。

### 【一町石から四町石】

①五仏（大日如来以外の四如来）

●一町石  阿閼如来 ○二町石  宝生如来 ○三町石  無量寿如来 ●四町石  不空成就如来

・ 金剛界曼荼羅の成身会などで中央の大日如来・四波羅蜜菩薩の周囲で十六大菩薩の各四菩薩の中心に描かれる四如来は、東・南・西・北（曼荼羅図上の下方から時計回り。）の順に続く。四基の町石すべてが再建されたものであり、その中に大日如来の種子を刻んだ町石がないことについては後述する。

二町石のまについては、教義上種子及び種子曼荼羅等からまなどに再検討を要すると考える。なお、愛甲昇寛『高野山町石の研究』(密教文化研究所 一九七三年) 一三三頁に、大正三年に大乘院松橋慈照師から金剛峯寺あてに出された高野山町石梵字の訂正願いについての記述がある。その中で「まなるべきところをま・・・となっている。右訂正願いたい。」とあるのは、この二町石のことではないかと思われる。四町石は鎌倉期の造立当初に予定していたものが変更されたのか、再利用されて慈尊院側の百六十一町石として現存している。その側面に「文永三年十月四日」とあることから紀年銘のある慈尊院側の町石では最古のものとなる。このことから、奥之院側の四町石は文永三年十月以降に造立されたものとなるが、現存しているのは大正二年に再建されたもの。

## 【五町石から八町石】

## ② 四波羅蜜菩薩

○五町石 ㊦ 金剛波羅蜜菩薩

●六町石 ㊦ 宝波羅蜜菩薩

○七町石 ㊦ 法波羅蜜菩薩

●八町石 ㊦ 羯磨波羅蜜菩薩

・ 金剛界曼荼羅の成身会などで、中央の大日如来の周囲に描かれる四波羅蜜菩薩が東・南・西・北(曼荼羅図上の下方から時計回り。)に順に続く。五町石から八町石までの四基の町石すべてが再建されたもの。

## 【九町石から廿四町石】

## ③ 十六大菩薩

●九町石 ㊦ 金剛薩埵菩薩

●十町石 ㊦ 金剛王菩薩

●十一町石 ㊦ 金剛愛菩薩

○十二町石 ㊦ 金剛喜菩薩

●十三町石 ㊦ 金剛宝菩薩

○十四町石 ㊦ 金剛光菩薩

○十五町石 ㊦ (㊦) 金剛幢菩薩

○十六町石 ㊦ 金剛笑菩薩

十七町石 ㊦ 金剛法菩薩

十八町石 ㊦ 金剛利菩薩

○十九町石 ㊦ 金剛因菩薩

二十町石 ㊦ 金剛語菩薩

廿一町石 ㊦ 金剛業菩薩

廿二町石 ㊦ 金剛護菩薩

廿三町石 ㊦ 金剛牙菩薩

廿四町石 ㊦ 金剛拳菩薩

・ 金剛界曼荼羅の成身会などで、大日如来・四波羅蜜菩薩の周囲に描かれる各四如来を中心として、十六大菩薩が四菩薩ごと  
に東・南・西・北（曼荼羅図上の大日如来・四波羅蜜菩薩を中心として下方から時計回り。）の順に続く。九町石から十六町石及  
び十九町石の九基の町石が再建されたものであり、十五町石の<sub>イ</sub>については、教義上種子及び種子曼荼羅等から<sub>イ</sub>などに再  
検討を要すると考える。十七町石、十八町石及び二十町石から廿四町石までの七基の町石は鎌倉期の造立当初のもの。なお、  
二十町石、廿一町石、廿二町石及び廿四町石は鎌倉期の造立当初に予定していたものが変更されたのか、再利用されて慈尊院  
側の百六十六町石、四十一町石、百七十一町石及び四十二町石として現存している。

## 【廿五町石から廿八町石】

## ④内四供養菩薩

廿五町石 <sub>イ</sub> 金剛嬉菩薩      廿六町石 <sub>イ</sub> 金剛鬘菩薩      廿七町石 <sub>イ</sub> 金剛歌菩薩      廿八町石 <sub>イ</sub> 金剛舞菩薩

・ 金剛界曼荼羅の成身会などでは、大日如来・四波羅蜜菩薩の周囲で内四供養菩薩が東南・西南・西北・東北（曼荼羅図上  
の左下方から時計回り。）の順に続く。廿五町石から廿八町石までの四基すべての町石が鎌倉期の造立当初のもの。なお、廿  
五町石及び廿六町石は鎌倉期の造立当初に予定していたものが変更されたのか、再利用されて慈尊院側の百六十八町石及び  
百七十町石として現存している。

## 【廿九町石から三十二町石】

## ⑤外四供養菩薩

廿九町石 <sub>イ</sub> 金剛焼香菩薩      三十町石 <sub>イ</sub> 金剛華菩薩      三十一町石 <sub>イ</sub> 金剛燈菩薩      三十二町石 <sub>イ</sub> 金剛塗菩薩

・ 金剛界曼荼羅の成身会などでは、十六大菩薩及び内四供養菩薩の外側に外四供養菩薩が東南・西南・西北・東北（曼荼羅図  
上の左下方から時計回り。）の順に続く。廿九町石から三十一町石までの三基の町石が鎌倉期の造立当初のもの。なお、前述

の大正三年に大乘院松橋慈照師から金剛峯寺あてに出された高野山町石梵字の訂正願いの中で「三十二町石 卍なるべきところ 卍となつてゐる。右訂正願いたい。」とあるように、再建された三十二町石の 卍 については、金剛塗菩薩とすれば教義上種子及び種子曼荼羅等から 卍 などに再検討を要すると考える。

【卍三町石から三十六町石】

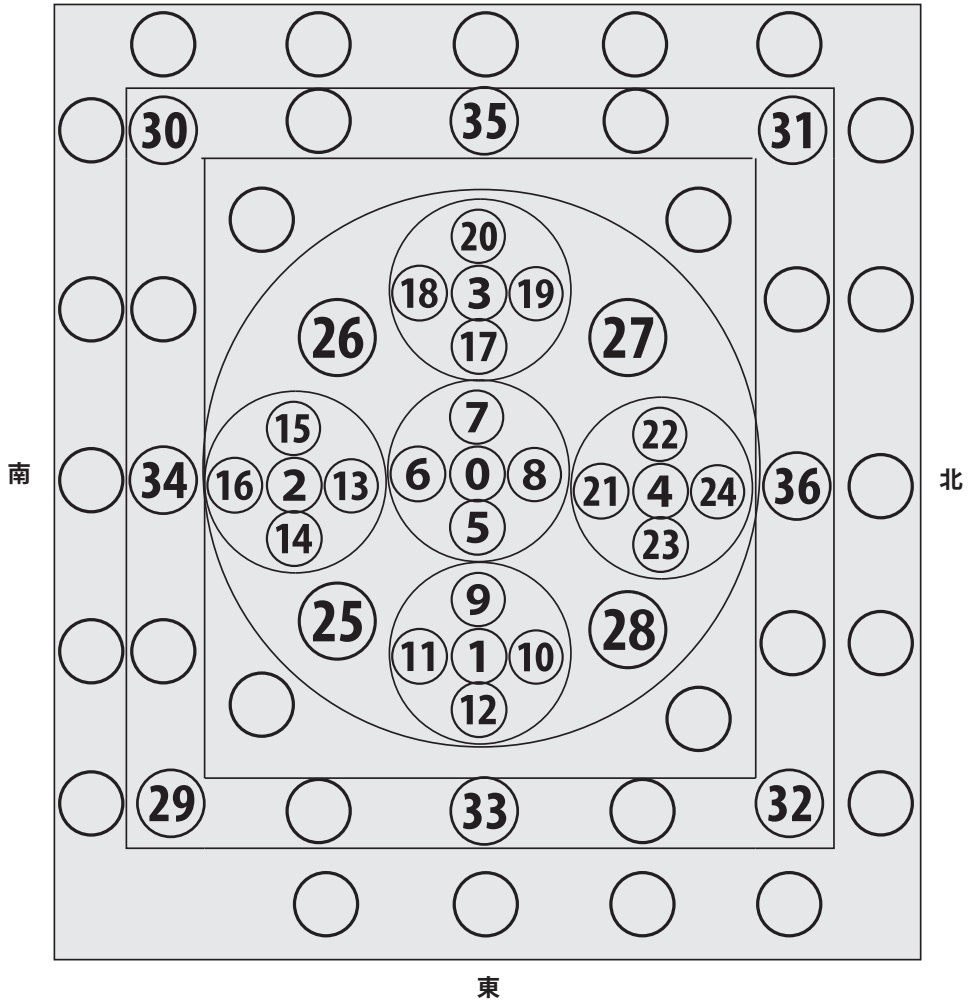
⑥ 四摂菩薩

- 卍三町石 卍 金剛鉤菩薩    三十四町石 卍 金剛索菩薩    三十五町石 卍 金剛鎖菩薩    三十六町石 卍 金剛鈴菩薩
- ・ 金剛界曼荼羅の成身会などで、十六大菩薩及び内四供養菩薩の外側に四摂菩薩が東・南・西・北（曼荼羅図上の下方から時計回り。）の順に続く。卍三町石は天正十八年に再建されたものであり、三十四町石から三十六町石までの三基の町石が鎌倉期の造立当初のもの。なお、三十六町石は弘法大師御廟玉垣内にあるために立ち入ることはできない。



【図表1】

金剛界曼荼羅（成身会）の三十七尊と奥之院側町石種子の対応図表  
西



※数字は町石の町数（中央の大日如来は、町石が存在しないため0としている。）

①五仏：0～4 ②四波羅蜜菩薩：5～8

③十六大菩薩：（東）9～12 （南）13～16 （西）17～20 （北）21～24

④内供養菩薩：25～28 ⑤外供養菩薩：29～32 ⑥四摂菩薩：33～36

数字のない○は、三十七尊以外の四大神及び外金剛部院・二十天

## 3 慈尊院側町石道の町石

高野山壇上伽藍から山麓の慈尊院までに百八十基の町石が一町（約一〇九m）間隔で立ち並ぶ。壇上伽藍中門の西側に慈尊院側一町石があり、慈尊院から丹生官省符神社への階段途中にある百八十町石までが大悲胎藏生曼荼羅（以下、単に「胎藏曼荼羅」という。）をあらわしていると考えられる。

現図系の胎藏曼荼羅は、大日如来をはじめとした中台八葉院、遍智院、蓮華部院、金剛手院、持明院、釈迦院、文殊院、除蓋障院、虚空藏院、蘇悉地院、地藏院、最外院で構成される（図表2参照）。慈尊院側の各町石に刻まれた種子については、先述のように種子曼荼羅等から諸仏諸尊名をあてはめると次のとおりになると推測する。

なお、再建された町石に誤った種子が刻まれて再検討を要すると思われる場合、その種子に続けて種子曼荼羅等から推測した種子の一例を（ ）内に記載している。また、諸仏諸尊名について他に考えられる諸仏諸尊名がある場合は、続いて（ ）内に記載している。（各町石に続き、刻まれている種子、再検討した種子があればその一例、各種子から当てはめた諸仏諸尊名、他に考えられる諸仏諸尊名があればその一例の順となり、若干の説明を加えている。）五輪塔形卒都婆（地輪、水輪、火輪、風輪、空輪）の地輪部（町数・種子などが刻まれた部分。）が江戸時代以前に再建されたものには○、大正・昭和・平成に再建されたものには●を付している。

## 【一町石から八町石】

- ① 中台八葉院
- 一町石 卍宝幢如来    ○二町石 卍開敷華如来    ○三町石 卍無量寿如来    ○四町石 卍（卍）天鼓雷音如来
  - 五町石 卍普賢菩薩    ○六町石 卍文殊師利菩薩    七町石 卍觀自在菩薩    八町石 卍弥勒菩薩
- ・胎藏曼荼羅の中央に描かれる大日如来を囲む如来・菩薩の中で、まず四如来が東・南・西・北（曼荼羅図上の上方から時計

回り)。四菩薩が東南・西南・西北・東北（曼荼羅図上の右上方から時計回り。）の順に続く。一町石から六町石までの六基の町石が再建されたものであり、七町石及び八町石の二基の町石が鎌倉期造立当初のもの。四町石の丸については、天鼓雷音如来とすれば教義上種子及び種子曼荼羅等から丸などに再検討を要すると考える。なお、中台八葉院を構成する一町石から八町石に加えて大日如来の種子を刻んだ町石がないことについては後述する。

### 【九町石から十三町石】

#### ②遍智院

九町石 丸 一切如来智印

十町石 丸 仏眼仏母

●十一町石 丸 (丸) 七俱胝仏母

十二町石 丸 大勇猛菩薩

十三町石 丸 大安楽不空真実金剛

・胎藏曼荼羅図上で中台八葉院の東（上）方に描かれる遍智院の横一列は、中央の一切如来智印から北（左）方向の後、中央から南（右）方向の順に続く。大正二年に再建された十一町石を除く四基の町石が鎌倉期の造立当初のものであるが、再建された十一町石の丸については、七俱胝仏母とすれば教義上種子及び種子曼荼羅等から丸などに再検討を要すると考える。

（註）町石種子の配列及び仏尊名については、首懸駄都種子曼荼羅厨子（奈良国立博物館蔵・額安寺伝来 一三八七年）、両界種子曼荼羅（比叡山滋賀院南北朝時代）、染川英輔 小峰弥彦 小山典勇 高橋尚夫 廣澤隆之『曼荼羅図展』（大法輪閣 一九九三年）などによる。

### 【十四町石から三十四町石】

#### ③蓮華部院

十四町石 丸 聖観自在菩薩

十五町石 丸 多羅菩薩

十六町石 丸 大明白身菩薩

十七町石 丸 馬頭観音菩薩

十八町石 丸 毘俱胝菩薩

十九町石 丸 大勢至菩薩

二十町石 丸 蓮華部発生菩薩

廿一町石 丸 寂留明菩薩

●廿二町石 丸 (丸) 大吉祥明菩薩

廿三町石 丸 大吉祥大明菩薩

●廿四町石 丸 如意輪菩薩

廿五町石 丸 耶輸陀羅菩薩



廿六町石 **㊦** 率觀波大吉祥菩薩      廿七町石 **㊧** 大隨求菩薩      廿八町石 **㊨** 白処觀自在菩薩      廿九町石 **㊩** 大吉祥變菩薩  
 三十町石 **㊪** 水吉祥菩薩      三十一町石 **㊫** 不空羼索菩薩      三十二町石 **㊬** 豐財菩薩      三十三町石 **㊭** 白身觀自在菩薩  
 三十四町石 **㊮** 被葉衣菩薩


・胎藏曼荼羅図上で中台八葉院の北(左)方に描かれる蓮華部院の縦三列では、南(右)側の縦列中央の聖觀自在菩薩から西(下)方向、中央から東(上)方向の順に続き、中央縦列、北(左)縦列の順で、ともに西(下)から東(上)方向へと続く。大正二年に再建された二十二町石、二十四町石を除く十九基の町石が鎌倉期の造立当初のものある、再建された二十二町石の**㊮**については、大吉祥明菩薩とすれば教義上種子及び種子曼荼羅等から**㊮**などに再検討を要すると考える。

【二十五町石から五十五町石】

④金剛手院






三十五町石 **㊯** 金剛薩埵菩薩      三十六町石 **㊰** 金剛手持金剛菩薩      三十七町石 **㊱** 金剛鉤女菩薩      三十八町石 **㊲** 發生金剛部菩薩  
 三十九町石 **㊳** 持金剛鋒菩薩      四十町石 **㊴** 金剛拳菩薩      四十一町石 **㊵** 忿怒月麗菩薩      四十二町石 **㊶** 虚空無垢持金剛菩薩  
 四十三町石 **㊷** 金剛牢持菩薩      ●四十四町石 **㊸** 忿怒持金剛菩薩      四十五町石 **㊹** 虚空無辺超越菩薩      四十六町石 **㊺** 金剛鑠菩薩  
 四十七町石 **㊻** 金剛持菩薩      四十八町石 **㊼** 持金剛利菩薩      四十九町石 **㊽** 金剛輪持菩薩      五十町石 **㊾** 金剛說菩薩  
 五十一町石 **㊿** 扱悅持金剛菩薩      五十二町石 **㊿** 金剛牙菩薩      ●五十三町石 **㊿** 離戲論金剛菩薩      五十四町石 **㊿** 持妙金剛菩薩  
 五十五町石 **㊿** 大輪金剛菩薩

・胎藏曼荼羅図上で中台八葉院の南(右)方に描かれる金剛手院の縦三列では、北(左)側の縦列中央の金剛薩埵菩薩から東(上)方向、中央から西(下)方向の順に続き、中央縦列、南(右)縦列の順で、ともに東(上)から西(下)方向へと続く。大正二年及び昭和三十五年に再建された四十四町石及び五十三町石を除く十九基の町石が鎌倉期の造立当初のもの。四十一町石及び四十二町石は、裏面に二十一町及び二十四町並びに種子**㊿**、**㊿**などが刻まれ、町数や種子から判断すると鎌倉期の造

立当初は奥之院側金剛界の町石となる予定であったことが分かる。なお、四十九町石の金剛輪持菩薩の種子については、とする種子曼荼羅等が多くみられる。



































【五十六町石から六十町石】

⑤持明院








- 五十六町石  不動明王 五十七町石  降三世明王 五十八町石  般若波羅蜜菩薩 五十九町石  大威徳明王
- 六十町石  勝三世明王
- ・胎藏曼荼羅図上で中台八葉院の西(下)方に描かれる持明院の横一列は、南(右)の不動明王から北(左)方向へと続く。
- 五十六町石から六十町石までの五基すべての町石が鎌倉期の造立当初のもの。

【六十一町石から九十四町石】

⑥釈迦院














- 六十一町石  釈迦牟尼仏 六十二町石  一切如来宝 ●六十三町石  (  ) 如来毫相 六十四町石  大転輪仏頂
- 六十五町石  光聚仏頂 六十六町石  無量声仏頂 六十七町石  如来悲 六十八町石  如来愍
- 六十九町石  如来慈 ●七十町石  如来燦乞底 七十一町石  梅檀香辟支仏 ●七十二町石  (  ) 多摩羅香辟支仏
- 七十三町石  大目犍連 七十四町石  須菩提 七十五町石  迦葉波 ●七十六町石  舍利弗
- 七十七町石  如来喜、 七十八町石  如来捨 七十九町石  白傘蓋仏頂 八十町石  勝仏頂
- 八十一町石  最勝仏頂転輪 八十二町石  高仏頂 八十三町石  摧碎仏頂 八十四町石  如来舌
- 八十五町石  如来語 八十六町石  如来牙 八十七町石  輪輻辟支仏 八十八町石  宝輻辟支仏
- 八十九町石  拘絺羅 九十町石  阿難 九十一町石  迦旃延 九十二町石  有波利

九十三町石  智拘絺羅      九十四町石  供養雲海

・胎藏曼荼羅図上で遍智院の東(上)方に描かれる釈迦院の横二列は、中央の釈迦牟尼仏から北(左)側の横列は、西(下)側、東(上)側の順でそれぞれ中央から北(左)方向へと続く。また、中央の釈迦牟尼仏から南(右)側の横列についても、西(下)側、東(上)側の順でそれぞれ中央から南(右)方向へと続く。大正二年に再建された六十三町石、七十町石及び七十二町石を除く三十一基の町石が、鎌倉期の造立当初のものであるが、再建された六十三町石の  については如来毫相とすれば教義上種子及び種子曼荼羅等から 、 又は  などに、七十二町石の  については多摩羅香辟支仏とすれば  などに再検討を要すると考える。なお、六十二町石の一切如来宝の種子については  とする種子曼荼羅等が多くみられる。

【九十五町石から百七町石】

⑦文殊院

|  |  |  |   |
|--|--|--|---|
| 九十五町石  文殊師利菩薩 | 九十六町石  光網菩薩 | 九十七町石  宝冠菩薩 | 九十八町石  無垢光菩薩 |
| 九十九町石  月光菩薩   | 百町石  妙音菩薩   | 百一町石  瞳母櫓   | 百二町石  髻設尼    |
| 百三町石  鄒波髻設尼   | 百四町石  質怛羅   | 百五町石  地慧恵   | 百六町石  鉤召使者   |
| 百七町石  鉤召使者眷属  |  |  |   |

・胎藏曼荼羅図上で釈迦院の東(上)方に描かれる文殊院の横一列は、中央の文殊師利菩薩から北(左)方向へと続いた後、中央から南(右)方向へと続く。九十五町石から百七町石までの十三基すべての町石が鎌倉期の造立当初のもの。

【百八町石から百十六町石】

⑧除蓋障院

|   |  |  |  |
|---|--|--|--|
| 百八町石  賢護菩薩 | 百九町石  施無畏菩薩 | 百十町石  破惡趣菩薩 | 百十一町石  悲愍菩薩 |
|---|--|--|--|

百十二町石 **も** 不思議恵菩薩(除蓋障菩薩) 百十三町石 **し** 悲愍慧菩薩 百十四町石 **お** 慈發生菩薩 百十五町石 **お** 折諸熱惱菩薩  
百十六町石 **あ** 日光菩薩(不思議恵菩薩)

・胎藏曼荼羅図上で金剛手院の南(右)方に描かれる除蓋障院の縦一列は、中央より東(上)側の賢護菩薩から東(上)方向、中央の不思議恵菩薩(除蓋障菩薩)から西(下)方向に続く。百人町石から百十六町石までの九基すべての町石が鎌倉期の造立当初のもの。除蓋障院では、除蓋障菩薩が主尊として位置するはずであるが、現図曼荼羅での主尊は不思議恵菩薩である。不思議恵菩薩が除蓋障菩薩であるとの説がある一方で、除蓋障菩薩は⑩地藏院に位置している。なお、地藏院の除蓋障菩薩を日光菩薩とする説もあるが確定には至っていない。百人町石の賢護菩薩については、曼陀羅の配列から尊名を推測したものであり、種子については **あ** 又は **す** などとする種子曼荼羅等がみられ、**あ** としたものについては確認していない。

【百十七町石から百卅八町石】

⑨虚空蔵院

|                              |                         |                               |                        |
|------------------------------|-------------------------|-------------------------------|------------------------|
| ●百十七町石 <b>お</b> 虚空蔵菩薩        | ●百十八町石 <b>そ</b> 檀波羅蜜    | 百十九町石 <b>あ</b> 戒波羅蜜           | 百二十町石 <b>そ</b> 忍辱波羅蜜   |
| 百廿一町石 <b>あ</b> 精進波羅蜜         | 百廿二町石 <b>あ</b> 禪波羅蜜     | 百廿三町石 <b>あ</b> 般若波羅蜜          | 百廿四町石 <b>も</b> 方便波羅蜜   |
| 百廿五町石 <b>あ</b> 願波羅蜜          | 百廿六町石 <b>あ</b> 力波羅蜜     | 百廿七町石 <b>あ</b> 智波羅蜜           | 百廿八町石 <b>あ</b> 共發意転輪菩薩 |
| 百廿九町石 <b>あ</b> 生念処菩薩         | 百三十町石 <b>あ</b> 忿怒鉤觀自在菩薩 | ●百三十一町石 <b>あ</b> ( <b>あ</b> ) | 不空鉤觀自在菩薩               |
| 百三十二町石 <b>あ</b> 千手千眼觀自在菩薩    | 百三十三町石 <b>あ</b> 無垢逝菩薩   | 百三十四町石 <b>あ</b> 蘇婆胡菩薩         |                        |
| 百三十五町石 <b>あ</b> 金剛針菩薩        | 百三十六町石 <b>あ</b> 蘇悉地羯羅菩薩 | ●百三十七町石 <b>あ</b> ( <b>あ</b> ) | 曼荼羅菩薩                  |
| ●百卅八町石 <b>あ</b> ( <b>あ</b> ) | 一百八臂金剛蔵王菩薩              |                               |                        |

・胎藏曼荼羅図上で持明院の西(下)方に描かれる虚空蔵院の横二列は、東(上)側の横列では中央の虚空蔵菩薩から北(左)方向、中央から南(右)方向の順、また、西(下)側の横列についても、中央から北(左)方向、中央から南(右)方向の順で続く。

大正二年に再建された百十七町石、百十八町石、百三十一町石、百三十七町石及び百卅八町石を除く十七基の町石が鎌倉期の造立当初のものであるが、再建された百三十一町石の<sup>㊦</sup>については不空鉤観自在菩薩とすれば教義上種子及び種子曼荼羅等から<sup>㊦</sup>又は<sup>㊦</sup>などに、百三十七町石の<sup>㊦</sup>については曼荼羅菩薩とすれば<sup>㊦</sup>などに、百三十八町石の<sup>㊦</sup>については一百八臂金剛蔵王菩薩とすれば<sup>㊦</sup>などに再検討を要すると思われる。

【百二十九町石から百四十六町石】

⑩ 蘇悉地院

- 百二十九町石 <sup>㊦</sup> 不空供養宝菩薩      ● 百四十町石 <sup>㊦</sup> 孔雀王母菩薩      百四十一町石 <sup>㊦</sup> 髻羅刹
- 百四十二町石 <sup>㊦</sup> 一面観自在菩薩      百四十三町石 <sup>㊦</sup> 不空金剛      百四十四町石 <sup>㊦</sup> 金剛軍荼利菩薩
- 百四十五町石 <sup>㊦</sup> 金剛将菩薩      百四十六町石 <sup>㊦</sup> 金剛明王
- ・ 胎蔵曼荼羅図上で虚空蔵院の西(下)方に描かれる蘇悉地院の横一列は、中央の不空供養宝菩薩から北(左)方向、中央から南(右)方向の順で続く。大正二年に再建された百四十町石及び百四十二町石を除く六基の町石が鎌倉期の造立当初のもの。

【百四十七町石から百五十五町石】

⑪ 地蔵院

- 百四十七町石 <sup>㊦</sup> 地蔵菩薩      百四十八町石 <sup>㊦</sup> 宝手菩薩      ● 百四十九町石 <sup>㊦</sup> 持地菩薩      ● 百五十町石 <sup>㊦</sup> 堅固深心菩薩
- 百五十一町石 <sup>㊦</sup> 除蓋障菩薩(日光菩薩)      百五十二町石 <sup>㊦</sup> 宝光菩薩      百五十三町石 <sup>㊦</sup> 宝印手菩薩
- 百五十四町石 <sup>㊦</sup> (不空) 不空見菩薩      百五十五町石 <sup>㊦</sup> 除一切憂冥菩薩
- ・ 胎蔵曼荼羅図上で蓮華部院の北(左)方に描かれる地蔵院の縦一列は、中央の地蔵菩薩から西(下)方向、中央から東(上)方向の順に続く。大正二年に再建された百四十九町石、百五十町石及び百五十四町石を除く六基の町石が鎌倉期の造立当初のもの。

ものであるが、再建された百五十四町石の<sup>イ</sup>については不空見菩薩とすれば教義上種子及び種子曼荼羅等から<sup>カ</sup>又は<sup>キ</sup>などに再検討を要すると考える。除蓋障院の主尊にあるはずの除蓋障菩薩が地蔵院に位置することについては、⑧除蓋障院においても述べたが、地蔵院の除蓋障菩薩を日光菩薩とする説があるとともに、除蓋障院の日光菩薩を除蓋障菩薩とする説があるが確定には至っていない。

#### 4 最外院の構成

最外院は、胎藏曼荼羅の図上では最外周に位置し、各方位を護持する八方天（東・北帝釈天、南焰魔天、西水天、北毘沙門天、北東伊舎那天、南東火天、南西羅刹、北西風天）に四方天（下方地天、上方梵天、日天、月天）を加えた十二天、四天王（東持国天、南增長天、西広目天、北毘沙門天）、星神（十二宮、二十八宿、九曜）、八部衆（天衆、龍衆、夜叉衆、乾闥婆衆、阿修羅衆、迦楼羅衆、緊那羅衆、摩睺羅伽衆）及び眷属などの二百余りの諸尊によって構成される。

曼荼羅図上の最外周の四方（四辺）では、東（上）、南（右）、西（下）、北（左）に前述の諸尊が描かれ、それぞれの中央に門が構えられている（以下「四門」と総称する）。四門では、守門天及び守門天女が東門を守衛し、南門を難陀龍王、烏波難陀龍王及び阿修羅王が守護する。また、西門を難陀龍王、跋難陀龍王、対面天及び難波天が、北門を難陀龍王、烏波難陀龍王、俱羅天及び俱羅天女が守護する。曼荼羅図上の四門の両側には、東門に帝釈天と持国天、南門に焰魔天と增長天、西門に水天と広目天、北門に毘沙門天と帝釈天が描かれ、八方天のうちの東、南、西、北を守護する四天が四天王と対になって四門それぞれを守護している。なお、帝釈天が東門に加えて、毘沙門天とともに北門についても護持することについては、梶尾祥雲『曼荼羅の研究』（高野山大学出版部、一九二七年）に詳しい。

百五十六町石から百八十町石までに刻まれた諸尊の種子については、種子曼荼羅等にある最外院二百余りの諸尊から二十五尊の種子を選ぶこととなる。町石と諸仏諸尊の数がほぼ一致するこれまでの中台八葉院をはじめとした十一院と比べて、最外院の

町石の諸尊名については、配列などから推測し難く不明なものもある。したがって、最外院の諸尊については、その方位や配列などを考慮しながら前述の十二天、四天王、星神、八部衆及び眷属などの種子から諸尊名を推測し得たものの一例を掲載する。ととし、不明なものは、「諸天・眷属等」と記載する。

【百五十六町石から百八十町石】

⑫最外院

|         |        |        |        |        |        |        |        |
|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| ●百五十六町石 | 伊舍那天   | 百五十七町石 | 諸天・眷属等 | 百五十八町石 | 諸天・眷属等 | 百五十九町石 | 日天     |
| 百六十町石   | 持国天    | 百六十一町石 | 諸天・眷属等 | 百六十二町石 | 梵天     | 百六十三町石 | 火天     |
| 百六十四町石  | 諸天・眷属等 | 百六十五町石 | 増長天    | 百六十六町石 | 諸天・眷属等 | 百六十七町石 | 諸天・眷属等 |
| 百六十八町石  | 諸天・眷属等 | 百六十九町石 | 羅刹     | 百七十町石  | 諸天・眷属等 | 百七十一町石 | 広目天    |
| 百七十二町石  | 水天     | 百七十三町石 | 月天     | 百七十四町石 | 風天     | 百七十五町石 | 諸天・眷属等 |
| 百七十六町石  | 諸天・眷属等 | 百七十七町石 | 毘沙門天   | 百七十八町石 | 帝釈天    | 百七十九町石 | 諸天・眷属等 |
| 百八十町石   | 諸天・眷属等 |        |        |        |        |        |        |

・百五十六町石から百八十町石までには、曼荼羅図上での最外院二百余りの諸尊から主要な二十五尊が選択され、東(上)、南(右)、西(下)、北(左)の順に主に続くと考えられる。大正二年に再建された百五十六町石を除く二十四基の町石が鎌倉期の造立当初のもの。百六十一町石、百六十六町石、百六十八町石、百七十町石及び百七十一町石には、裏面に種子と町数がそれぞれに、**卍**四町二十町、**卍**二十町、**卍**廿五町、**卍**廿六町及び**卍**廿二町などと刻まれていることから、各種子から判断すると当初は奥之院側金剛界の町石となる予定であったことが分かる。

大正二年に再建された百五十六町石に刻まれた種子**卍**が鎌倉期造立当初に刻まれた種子と変わりがなくすれば、八方天の一尊で北東を守護する伊舍那天をあらわす種子が**卍**又は**卍**などであることから、百五十六町石から百八十町石までに刻ま

れた最外院主要二十五尊の種子は、曼荼羅図上の北東（左上）から始まり、時計周りに東（上）、南東（右上）、南（右）、南西（右下）、西（下）、北西（左下）、北（左）の順で主に続いていると考えられる。したがって、北東（左上）百五十六町石 ㊦伊舎那天、東（上）百六十町石 ㊧持国天、南東（右上）百六十三町石 ㊨火天、南（右）百六十五町石 ㊩增長天、南西（右下）百六十九町石 ㊪羅刹、西（下）百七十一町石 ㊫広目天、百七十二町石 ㊬水天、北西（左下）百七十四町石 ㊭風天、北（左）百七十七町石 ㊮毘沙門天、百七十八町石 ㊯帝釈天の順で八方天と四天王が続くと考えるが、八方天の中で帝釈天及び焰魔天の町石の位置については後述する。

十二天のうち八方天以外の四方天について、曼荼羅図上で東（上）に描かれる上方守護の日天及び梵天が、百五十九町石 ㊰及び百六十二町石 ㊱に、曼荼羅図上の西（下）に描かれる上方守護の月天が百七十三町石 ㊲にあると考えるが、曼荼羅図上の東（上）に描かれる下方守護の地天については後述する。

以上、曼荼羅図上の最外院で各方位を守護する諸尊の種子が刻まれていると考えられる町石について述べたが、曼荼羅図上で各方位を守護する諸尊の間に散在する八部衆、星神の九曜・二十八宿・十二宮及び眷属などから十一の諸尊が選択されて、町石に各種子が刻まれていると考える。

曼荼羅図上の四門両側に位置する諸尊の中で、東門にあたる町石の並び位置には、持国天であり、帝釈天が選ばれていないとすれば、その理由は帝釈天が北門の守護でもあることから、重複を避けたと考える。また、同様に南門にあたる町石の並び位置には、增長天だけであり、焰魔天が選ばれていないとすれば、その理由は南門を守護する焰魔天を町石道起点（終点）の百八十町石に起用するためだった可能性もある。ただし、⑫最外院欄の中で百八十町石 ㊳については不明として諸尊（諸天・眷属等）と記載した。

これまで、百八十町石に刻まれた種子 ㊳については、毘沙門天であるとされてきた。しかし、最外院の諸尊の配列から、北門の両側の位置に百七十八町石の帝釈天 ㊰と百七十七町石の毘沙門天 ㊱が並んでいると考えるのが自然と考える。

ここで、なぜ町石道起点（終点）の百八十町石が焰魔天 ㊴であるかが問題となる。インドの神で仏教に取り入れられた焰



魔天は中国で閻魔大王となる。町石造立時期と重なる鎌倉時代以降に彫像・凶像ともに各地で数多く製作された忿怒の形相の閻魔大王こそが高野山への登山口(関門)の守護にふさわしいとの考えから登用されたのではないかと推測できるかもしれない。

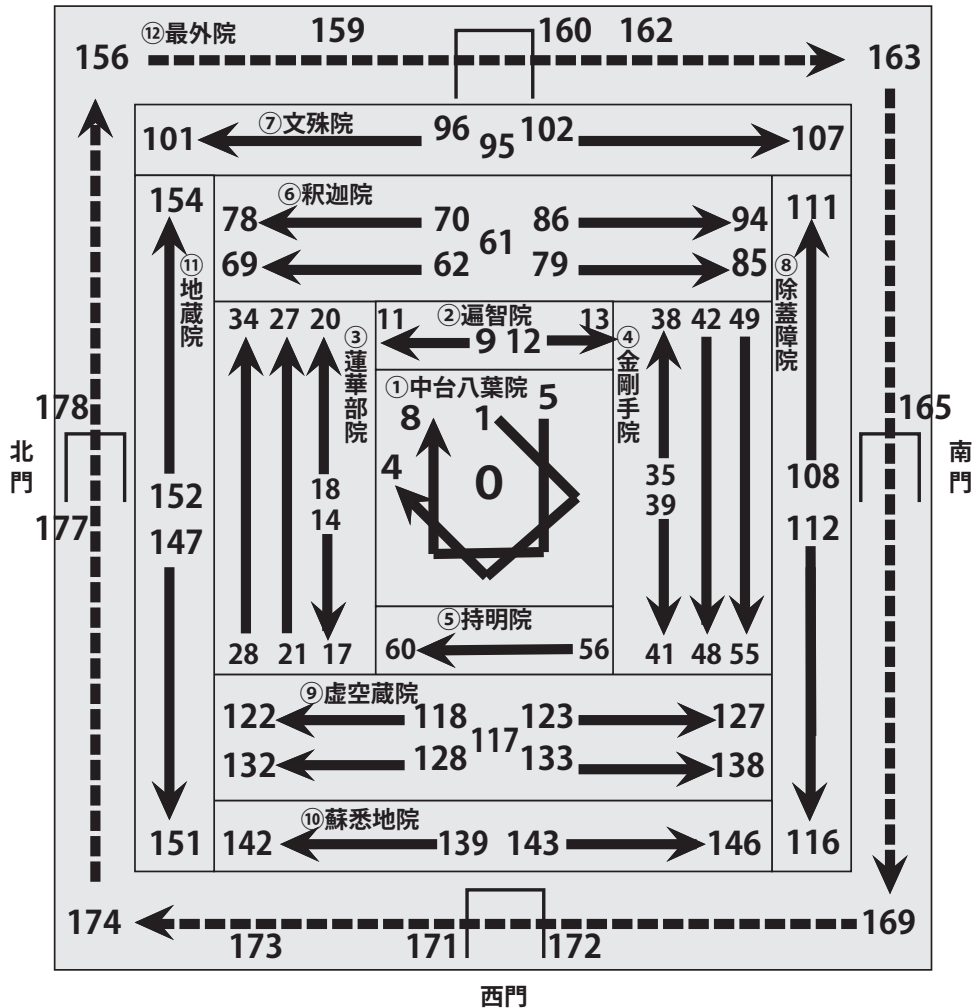
百五十六町石から百八十町石までの町石には、十二天の中で八方(四方・四維)の守護(帝釈天、焰魔天、水天、毘沙門天・伊舎那天、火天、羅刹、風天)及び上方の守護(梵天、日天、月天)にあたる種子が刻まれていると推測するが、下方の守護である地天(堅牢地神)の種子が含まれていない。種子曼荼羅等や配列からすれば、百五十八町石の種子又又は百五十九町石の種子にあたるとも考えられるが、本稿では不明としたい。

最外院では、百五十七町石、百五十八町石、百六十一町石、百六十四町石、百六十六町石、百六十七町石、百六十八町石、百七十町石、百七十五町石、百七十六町石、及び百七十九町石についても種子曼荼羅等や配列から諸尊名の推測を試みたが、各方位を守護する十二天や四天王ほど二百余りの諸尊から選択された理由に乏しく、したがって本稿では不明とし、今後の課題としたい。



【図表 2】

胎蔵曼荼羅（四百余尊）と慈尊院側町石種子（百八十尊）の対応図表  
東門



※数字は町石の町数（中央の大日如来は、町石が存在しないため0としている。）であり、矢印方向に数字が大きくなる。

最外院（最外周）二百余尊から選ばれている二十五尊（156～180）については、四天王、又は十二天の種子が刻まれていると推測する町石の町数を表記している。なお、矢印方向と前後しているものがある。

## 5 大日如來の種子を刻んだ町石について

高野山町石二百十六基の各種子が本稿で記載したとおりであることが許されるならば、金剛界曼荼羅及び胎藏曼荼羅の中心に描かれている大日如來をあらわした種子（胎藏 毘摩、金剛界 ままなど）を刻んだ町石がその中に含まれていないこととなる。

そのことに関連するが、高野山壇上伽藍近くにある慈尊院側の胎藏曼荼羅、奥之院側の金剛界曼荼羅の各一町石自体が高野山町石道の起点（終点）ではなく、起点（終点）はそのおよそ一町（約一〇九m）ほど先（手前）にあるのではないかと考える。

高野山町石道の起点（終点）が中門、金堂、壇上伽藍など諸説あるが、慈尊院側・奥之院側両一町石のさらに一町（約一〇九m）ほど先（手前）に存在するものを考えてみればよい。

それは慈尊院がいわゆる「発心門」とされ、慈尊院側の胎藏曼荼羅をあらわす町石百八十基がそれぞれ大日如來の分身である諸仏諸尊であり、胎藏曼荼羅の図上外側から中心の大日如來に向けて修行を重ねていく「向上門」とするならば、百八十町石から修行を重ねてたどり着く先は一町石ではなく、胎藏曼荼羅の図上中心にある大日如來を本尊とする根本大塔である。つまり根本大塔そのものが五輪卒都婆形をした巨大な町石に例えられるならば、一町石の先（手前）にあるのが「0町石」（起点・終点）であり、このことから大日如來の種子を刻んだ町石が慈尊院側胎藏曼荼羅の町石百八十基の中に存在しないということが理解できるのではないかと考える。

また、慈尊院がいわゆる「発心門」であれば、壇上伽藍は「等覚門」であって、「発心門」から修行の結果、「等覚門」で悟りに近づく。そして、そこから奥之院御廟に向かうとすれば、その始まりは根本大塔のすぐ東側にある奥之院側の一町石ではなく、西におよそ一町（約一〇九m）手前（先）にあるものであり、それがすなわち金剛界曼荼羅の図上中心にある大日如來を本尊とする西塔であると考ええる。換言すれば、壇上伽藍西端に建つ西塔もまた五輪卒都婆形をした巨大な町石に例えられるならば、一町石の手前にあるのが「0町石」であり、このことから大日如來の種子を刻んだ町石が奥之院側の金剛界曼荼羅の町石三十六基の中に存在しないということが理解できるのではないかと考える。

## おわりに

高野山町石に刻まれた各種子の諸仏諸尊名については、鎌倉期造立当初の記録が残っていないことから、これまでの調査研究などにも諸説があり、全てを解明できたとは言いがたい。特に胎藏曼荼羅の最外院については二百余りの諸尊から主要な二十五尊の選択を私に試みたが、これまでの見解等と違う点があり異論も少なくないと思われる。当論考に対してご意見やご指導をいただければ幸甚に存じ、今後、さらなる調査研究を重ねることにより、高野山町石の全容が解明される日が来ることを期待したい。

## 附記

町石に刻まれた梵字の書体については、鎌倉期当初の筆者が小川信範、安永期再建時の筆者が前法務寛深、大正期再建時が成蓮院上綱宮野宥智僧正などとされ、諸流派があり異体字などもあることから忠実に再現することはしていない。また、梵字の判読に誤りがあることも考えられるが、基本は諸仏諸尊の種子をあてることとしている。

なお、本稿の作成において、参考とした種子曼荼羅（図）等の諸資料について和歌山県立博物館、比叡山延暦寺国宝殿、高野山霊宝館など多くの関係の方々からご教示とご協力をいただいたことに厚く感謝を申し上げます。

主な参考文献等

- 梅尾祥雲『曼荼羅の研究』(高野山大学出版部 一九二七年)  
静慈圓『梵字悉曇』(朱鷺書房 一九九七年)  
宮野宥智監修『梵習悉曇種子類聚全』(原本沙門澄禪(松本日新堂本店 一九三七年)  
岩田教順『改訂 句義入 梵文真言鈔』(中山書房仏書林 二〇〇五年)  
越智淳仁『因説・マンガラの基礎知識』(大法輪閣 二〇〇五年)  
染川英輔 小峰弥彦 小山典勇 高橋尚夫 廣澤隆之『曼荼羅図展』(大法輪閣 一九九三年)  
愛甲昇寛『高野山町石の研究』(高野山大学密教文化研究所 一九七三年)  
木下浩良『改訂版 はじめての「高野山町石道」入門』(セルバ出版 二〇〇九年)  
橋詰弘『空海と行く宇宙古道』(大阪書籍 二〇〇二年)  
中原慈良「高野山町石道という曼荼羅」『密教学会報』(高野山大学密教学会 二〇一七年)  
松山健『世界遺産「高野山町石道・語り部の小箱」』(西岡総合印刷 二〇〇五年)  
『中世高野山縁起集』真福寺善本叢刊第九卷 国文学研究資料館(臨川書店 一九九九年)  
『大正新脩大藏經圖像』(大正新脩大藏經刊行會 一九三三年)  
高野山円通寺『両界種子曼荼羅図』鎌倉時代  
比叡山滋賀院『両界種子曼荼羅』南北朝時代  
『首懸駄都種子曼荼羅厨子』(奈良国立博物館蔵・額安寺伝来 一三八七年)

